

う。せめてドナウの河岸にでも出れば、幾らか此の苦熱を避け得られるかも知れないと思つて、此の地で邂逅したKさんを引つぱつて、ライヒス・ブリュッケの袂まで車を驅つた。橋を渡りながら上下を眺めると、遙か川上に丁度鋸山の様な恰好をして突き出て居る一脈の山の外には、渺々として限無き平野の中を、汪洋として流れるドナウが光つて居る。

向側の河原に轉がつて居る老若男女が、たゞ赤や白やの色の固まりを撒き散らした様に見える。橋を渡り切つた處に設けてある、城櫓の階段の様な感じのする下り口を下りて河原に出ると、妙齡の婦人までが、橋蔭に脚もあらはに寝そべつたまゝで、折柄賣り歩く駄菓子類を頬張つて居るのもある。大分東洋風の光景が増して来る。河の中に抜き手を切つて泳ぐ船頭の、赤銅色の皮膚と赤禪なども、ずつと下流から上つて來たオリエントの血で染め上げたものに違ないと定めた。勇敢なるKさんは、髀肉の感に堪へかねたものか、土俵入りでもある様な恰好で素裸に白禪を靡かせて、悠然水邊に立つ。男も女も若きも老いたるも、寝そべつたのは起き直り、腰を下して居たのは立ち上つてまでも好奇の眼を光らして視つめる。自分は、面はゆい感じに堪へかねて、仰向に寝轉んで青空を眺めることしたから其の様子は見なかつた。

かくして纔に苦熱を免れる様な數日をウインに送つた後、川を下に一日程、匈牙利の首都ブダ・ペストに着いた。



こゝでは暑さは七十年目ださうだ。自分の來ることをこゝに居るTさんから聞いて、態々迎へに來てくれた匈牙利